広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第58号　2009　27－35

ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題

山　田　浩　之

（2009年10月６日受理）

The Significance and the Problems of Student Surveys at “Border-Free University”

Hiroyuki Yamada

Abstract: Owing to the decrease of the population of 18 year-old from the late of 1990s in Japan, around the half of private universities are short of their quotas. Such universities are called “Border-Free Universities”, which do not have the obstacles to enter and are accepting applications for admission on the recommendation systems. In this article, the significance and the problems of student surveys at “Border-Free Universities” will be discussed. Firstly, the problems of current student surveys are examined. Secondly the characteristics of the students of “Border-Free Universities” are clarified using the survey results of universities in the west of Japan in 2008. Finally, from the examination above, three topics are discussed. 1) Universities in Japan are stratified and classified in a few types. “Border-Free Universities” are completely different from other types, so that the unique research frameworks to examine such universities. 2) The activities of each university affect the student behaviors, so the difference of each university should be examined. 3) To clarify the relationship between the activities of each university and student behaviors, fieldwork and other qualitative methods are required in the research at “Border-Free Universities”.

Key words: student survey, Border-Free Universities, student behavior, university students
キーワード：学生調査，ボーダーフリー大学，学習行動，大学生

1　問題の所在

本論文は，ボーダーフリー大学，すなわち，マージナル大学やＦランク大学などと呼ばれる低ランクの大学における学生調査の意義と課題を明らかにすることを目的としている。

2007年における高等教育機関への進学率は76.3％，大学学部への進学率は47.2％であった。1990年の大学（学部）への進学率は24.6％であったから，この20年で約２倍も上昇したことになる（以上，『文部科学統計要覧』平成20年度版による）。

こうした大学への進学者の増加は，たんに約半数の者が大学に進学するようになったことを意味するだけではない。かつての大学は受験というフィルターを通すことにより，入学者の学力を一定の水準以上に限定することが可能であった。また同年齢人口の限られた割合しか進学しないという事実は，大学進学者をある社会層に限定することになったとも考えられる。1990年代初頭にいわゆる浪人生の数が最大になったとされることを考えると，大学への進学は，それだけ高い学力と学習にかける時間，さらには進学への強い意欲と意志が必要とされるものだったともいえよう。すなわち，1990年頃までの大学進学者層は，学力も社会階層も上層に偏っていた。

しかし，1990年代の後半以降，18歳人口が低下するとともに，大学の大衆化は急速に進んだ。そのことは，大学受験というハードルを失わせるとともに，経済的余裕と進学の意志さえあれば，誰もが大学に進学することを可能にした。

このことを象徴するのが，2000年に現れた「Ｆラン

ク」という大学への入学難易度を示す言葉である。Ｆランクとは河合塾による大学の格付けであり，調査対象の受験者すべてが合格しているため通常の難易度がつけられない大学を意味している。このＦランクの大学が全国の私立大学の４割を占めていたという（『週刊朝日』朝日新聞社，105(26)，2000年６月23日）。また，この状況は現在も続いており，2009年には私立大の46.5％が，また短期大学の69.1％が定員割れをしているとされる（『朝日新聞』2009年７月31日）。つまり，ほぼ半数の大学は学力水準が低くとも進学が可能ということになる。

こうした大学の状況は，高校生の進学行動に大きな影響を与えたと考えられよう。実際に竹内（1991）は90年代初頭に,「受験のポストモダン」の到来を予見し,「ダサイ受験生」「クライ受験生」が「受験世界の旧人類として」捨て去られ,「受験世界の新人類である『あかるい』受験生」が登場したとしている（竹内 1991 194-195頁）。また，山田（2004）は，こうした「受験生の受験からの撤退や，遊技としての受験というポストモダン的な状況」（山田 133頁）は1990年代の終わりに生じたとしている。つまり,「大学」という機関に進学するには，すでに必ずしも受験勉強を必要としない。「受験生」という一時期を明るく過ごし，進学できる大学を選択するだけで良いことになる。

このような大学受験の状況を背景にして，現在の大学には従来の学生像では説明できない，これまでとは大きく異なる学生が入学するようになった。なかでも大学の底辺を支えるボーダーフリー大学に入学する学生は研究大学や中堅国公私立大学とは大きく異なっている。また後述するように，大学には学習指導や生活指導のため，さまざまな努力が強いられている。

そこで，本稿はこうしたボーダーフリー大学に在学する学生の実態を明らかにし，その研究の意義を検討する。また，それとともにボーダーフリー大学を調査する際の方法論上の問題について論じたい。

なお，本稿でいうボーダーフリー大学を厳密に定義することは難しい。だが，次のように定義しておきたい。つまり，いわゆるＦランク大学と呼ばれ，入学者が定員を切っている大学，および，入学難易度が非常に低い大学である。

２　学生研究の現状

大学の大衆化によって多様な学生が大学に進学し，現在の学生像は既存の枠組みでは捉えられなくなっている。また1990年代終わりからの急激な大学改革により，学生や社会のニーズに応じた制度，カリキュラムや授業が求められるようになっている。

このような状況を背景にして，90年代以降，数多くの学生調査が行われてきた。とくに武内清らは，20大学以上を対象にした調査を継続的に行い，現在の学生像を明らかにしてきた（たとえば，武内清編 2003）。また，秦政春らも同様の関心によって学生調査を行っている（大阪大学大学院人間科学研究科教育技術開発学研究室編 2004）。さらに，金子元久らによっても精力的に学生研究が進められている（東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター 2008）。筆者らもとくに資格取得など近年の学生の学習行動に着目した研究を行ってきた（藤井ら編 2005，山田ら編 2007）。

しかしながら，これまでの調査の多くは，多様な大学の学生を総体的にとらえ，それを現在の学生像として提出してきた。つまり，研究大学の学生も底辺大学の学生も一まとめにして，学生像が語られてきた。ところが，筆者らの調査によれば，実際の学生の行動や意識は，大学によって，とくに大学の社会的位置づけによって大きく異なっていた。なかでもボーダーフリー大学では，学習行動も生活も従来の学生像とは大きくかけ離れた学生が入学している。そのため，ノートのとり方など基本的な学習習慣の指導から，言葉遣いや服装など生活習慣の指導などに大きな比重が裂かれるようになっている。すなわち,大学が文字通り「学校化」し,かつての底辺高校で求められた「生徒指導」に近いものが求められるようになっている。このようにボーダーフリー大学では，これまでの大学では考えられなかった教育・指導方法を採用するようになっている。しかしながら，現在の大学研究，また大学改革の多くは,いわゆる研究大学が中心にされており,ボーダーフリー大学の現状に対応した方策は十分に検討されてこなかった。

とはいえ，近年になって，本報告のいうボーダーフリー大学にあたる大学に関する分析も行われるようになっている。それは「マージナル大学」での就職問題を扱った居神（2005),また,苅谷ら（2006),望月（2008）などである。ただし，これらの論考は，主にボーダーフリー大学での学生の就職問題を中心に扱っている。

また，筆者らはすでにこれまで行った学生調査をもとに，ボーダーフリー大学の特徴を指摘している。2002年と2005年に行った調査から,地方私立大である,Ｘ大学とＹ大学を比較しておこう。Ｘ大学は当時，偏差値50前後の中堅大学，Ｙ大学は偏差値40前後の，いわゆるボーダーフリー大学である。

表１には大学の授業に対する態度と意識を大学別に示した。ここに示した数値は「とてもあてはまる」か

表１　大学の授業に対する態度と意識

	私立Y大学	私立X大学	
授業はできるだけ休まないようにしている	4.24	4.05	
楽しみにしている授業がある	3.22	3.25	
授業の内容について質問することがある	2.37	1.98	**
授業中に私語をすることが多い	3.03	2.79	
きちんとノートを取りながら授業を聞いている	3.45	3.69	
授業中，他のことを考えていることが多い	3.50	3.61	
授業中，授業に関係のない本を読んだり，他の勉強をしたりすることが多い	2.11	2.65	**
授業中によく居眠りをする	3.12	3.12	
卒業に必要無い授業は履修しないようにしている	2.79	2.84	
成績はできるだけA（秀）を取ろうとしている	3.71	3.77	
授業中に携帯電話でメールの読み書きをする	2.75	3.38	**
授業に出席することを苦痛に感じることが多い	2.79	3.21	**
授業で考え方が変化したことがある	2.96	3.22	*
大学の授業は役に立たないと思う	2.30	2.67	**
自分の成績は良い方だと思う	2.22	2.80	**

注：「とてもあてはまる」(5) から「まったくあてはまらない」(1) の５段階の回答の平均値を算出した。
** は P<0.001，* は P<0.01を示す。表２も同様に表記した。

ら「まったくあてはまらない」という５段階の回答の平均値である。

この表からわかるように，ボーダーフリー大学の学生の授業に対する態度は決して低くはない。たとえば「授業の内容について質問することがある」では，2.37と私立Ｘ大学の1.98を上回る値になっている。

また，受講態度に問題のある「授業中，授業に関係のない本を読んだり，他の勉強をしたりすることが多い」や「授業中に形態電話でメールの読み書きをする」では，私立Ｘ大学の値の方が高くなっていた。さらに授業に対して否定的である「授業に出席することを苦痛に感じることが多い」「大学の授業は役に立たないと思う」でも，私立Ｘ大学の値が高くなっていた。

このようにボーダーフリー大学である私立Ｙ大学の学生の受講態度は，中堅大学である私立Ｘ大学を上回るものであった。

こうした状況は就職に対する意識でも同様であった。「大学入学前から就職したい業種や職種を決めていた」では，私立Ｙ大学の値は3.45と私立Ｘ大学の2.95を上回っていた。また，「大学での勉強は就職に役立つと思う」でも私立Ｙ大学は3.97と私立Ｘ大学の3.32よりも高く，私立Ｙ大学の学生が，大学での勉強を就職と結びつけて考えていた。

以上のように，ボーダーフリー大学の学生は，中堅私大と比較して，受講態度はまじめであり，また明確な職業意識を持っていることがわかる。偏差値の差が示すように，ボーダーフリー大学の学生は，学力では中堅大学ほど高くはない。それにもかかわらず，ボーダーフリー大学の学生がまじめな受講態度と明確な職業意識を持っているのは，ボーダーフリー大学が，学生の状況に応じた指導を行っているからだと考えられるだろう。例えば，私立Ｙ大学では，キャリア支援のために，１年生から４年生まで少人数でのゼミを必修としている。このゼミではたんにキャリア教育を行うのみでなく，ノートのとり方など基礎的な大学での学習方法についても指導が行われる。

また，ゼミの担当教員は講義の担当の教員と連絡を取り合い，問題のある学生をピックアップし，個別に指導を行っている。さらには，個別の授業で次のように学生に対応しているとされる。

> 通常の講義時には，携帯電話は音が鳴らないようにしてかばんの中に入れること，入室後は帽子を脱ぐこと，と毎時間のように注意する。さらに私語をしたり，机にうつぶせになって眠ったりしている学生がいれば，側まで行き肩を叩く。注意をする際には，「社会では，人の話を聞く態度を身につけているかが問われるよ」などと現時点の態度を改めることが将来プラスになることを告げ，態度改善の動機付けとしている。（櫻田 2007 65頁）

すなわち，こうした大学による組織としての，また個々の教員の取り組みが，ボーダーフリー大学の学生の学習行動や，就職意識を高めていると考えられる。

３　ボーダーフリー大学の学生たち

(1) 調査の対象と方法

以上のような先行研究をもとに，あらためて，ボーダーフリー大学に在学する学生の実態を明らかにし，

ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題を明らかにしよう。

以下で検討するのは，2008年度に行った地方私立大学を中心とした学生調査，すなわち西日本の11大学での調査結果である。そのうち表２に示した，比較的サンプル数の多い８大学を分析対象とする。対象校のうちＡ大学からＤ大学までが偏差値30台のボーダーフリー大学である。Ｅ大学は偏差値40台の中堅校である。中堅校が１校だけなのは，現在の地方私立大は多くがボーダーフリー大学であり，今回，調査できたのはこの中堅校１校のみであった。また，国立は地方都市にあるＦ大学からＨ大学の３校である。

なお，対象校が特定される可能性があるため，ここでは各大学の専攻分野を示していない。だが，私立大学は，人文系，社会科学系が中心である。また国立大学はとくにＦ大学とＧ大学で教育学部が中心であるが，人文系，自然科学系の学生も一定数含まれている。また，いずれも共学校だが，私立Ｃ大学で女子の比率が高くなっている。

このように各大学で対象とする学生にバラツキがあるため，以後の分析ではその点を考慮する必要がある。しかし，こうしたバラツキ自体，各大学の個性であると言うこともできるだろう。

表３には，調査対象者がどのような受験によって大学に入学したかを示した。表右の推薦の比率に示したように，私立Ａ大学からＤ大学は，いずれも推薦入学者の比率が６割から７割になっている。推薦によって大半の学生を集めるという点もこれらの大学がボーダーフリー大であることを特徴付けていよう。

(2) 高校時代の状況

まず，大学入学前，すなわち高校時代の状況を検討しておこう。表４には「学校の勉強の予習・復習をよくした」という質問に対する回答を，上段には，大学のカテゴリー別に，下段には大学別にクロス表を示した。なお，この表は「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の５段階の回答を３段階に集計した結果である。

表２　調査対象校の特徴

		偏差値	対象者数（女子の比率）
私立	Ａ大学	30台	758(47.1)
	Ｂ大学	30台	151(33.8)
	Ｃ大学	30台	510(83.5)
	Ｄ大学	30台	394(42.6)
	Ｅ大学	40台	299(62.2)
		センター得点率	
国立	Ｆ大学	70％台	825(49.1)
	Ｇ大学	60％台	498(70.9)
	Ｈ大学	60％台	143(40.6)

注：「偏差値」「センター得点率」は河合塾偏差値ランキングによる。

この表からわかるように，大学のカテゴリーによって，高校時代の勉強の度合いが大きく異なっていた。ボーダーフリー大学で「あてはまる」とした者の割合は30.0％とかなり低く，国立大では51.9％と高くなっていることがわかる。これは，個別の大学でも多少の増減はあるものの同様の傾向が見られた。ボーダーフリー大学の学生は，高校時代，それほど熱心に学習していなかったことがわかろう。

表５には「アルバイトをよくした」という質問に対する回答を示している。ボーダーフリー大学で「あてはまる」の値は26.3％と高くなっていた。これも大学別に見ると，やはり多少の増減はあるものの，大学カテゴリーによる明確な違いがあることがわかる。

以上のようにボーダーフリー大学の学生には，高校時代，それほど熱心に勉強せず，アルバイトをするなど学習以外の活動をしていた学生が多くなっていた。その他にも「カラオケによく行った」などの質問で，ボーダーフリー大学の学生の値が高くなっており，いわば高校生活を遊びによって楽しく過ごしていた者が多いことが推測される。

このことは，表６に示した，高校時代の学習時間に

表３　調査対象者の受験形態

		一般入試	センター利用	推薦	ＡＯ入試	編入学	その他	計	推薦の比率
私立	Ａ大学	29.5	4.6	44.7	19.2	0.6	1.5	100.0(723)	63.9
	Ｂ大学	20.1	16.0	57.6	0.0	0.0	6.3	100.0(144)	57.6
	Ｃ大学	21.4	5.1	67.5	2.9	0.0	3.1	100.0(486)	70.4
	Ｄ大学	18.4	5.5	53.2	16.3	1.8	4.7	100.0(380)	69.5
	Ｅ大学	55.3	13.7	25.4	4.5	0.7	0.3	100.0(291)	29.9
	全体	29.8	7.1	48.5	11.2	0.6	2.8	100.0(2,086)	59.6
		前期	後期	推薦	ＡＯ	編入学	その他		
国立	Ｆ大学	63.6	13.9	0.1	20.5	1.8	0.0	100.0(818)	20.7
	Ｇ大学	51.8	17.9	29.8	0.0	0.2	0.2	100.0(496)	29.8
	Ｈ大学	74.8	14.0	9.8	1.4	0.0	0.0	100.0(143)	11.2
	全体	59.1	15.8	12.2	11.4	1.1	0.4	100.0(1,521)	23.6

表４　学校の勉強の予習・復習をよくした

	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	計	
BF 大	30.0	19.9	50.1	100.0	**
私立中堅大	40.6	18.5	40.9	100.0	
国立大	51.9	11.5	36.6	100.0	
計	39.9	16.4	43.8	100.0	
A 大学	22.4	17.2	60.4	100.0	**
B 大学	32.5	27.8	39.7	100.0	
C 大学	38.8	20.9	40.4	100.0	
D 大学	32.3	21.0	46.7	100.0	
E 大学	40.6	18.5	40.9	100.0	
F 大学	55.7	9.3	35.0	100.0	
G 大学	50.9	14.7	34.4	100.0	
H 大学	33.6	13.3	53.1	100.0	
計	39.9	16.4	43.8	100.0	

注：表中の数値は％。また ** は P<0.001，* は P<0.01を示す。「BF 大」は「ボーダーフリー大学」を示す。以下の表も同様に表記した。

表６　高校３年生のころの家や塾での１日の学習時間

大学	時間	
BF 大	1.67	**
私立中堅大	2.80	
国立大	3.87	
計	2.67	
A 大学	1.40	**
B 大学	1.80	
C 大学	1.84	
D 大学	1.93	
E 大学	2.80	
F 大学	3.87	
G 大学	3.92	
H 大学	3.73	
計	1.40	

注：表中の数値は平均時間。

明確に反映されている。ボーダーフリー大の学生の高校時代の勉強時間は1.67時間に過ぎず，国立大の学生の3.87時間の半分以下であった。これは，近年の高校生の進学形態を示すものでもある。つまり，高校入学時から，センター試験で多くの科目の勉強をしなければならない国立大への進学をあきらめ，受験科目の少ない私立大を目指し，しかも，高校時代にそれほど勉強しなくとも進学できる大学に入るといった傾向を顕著に示している。こうした進学形態をとる高校生が，ボーダーフリー大に入学しているのである。

(3) 大学での学習行動

それでは，大学では，どのように学習に取り組んでいるのだろうか。学習への意識と学習行動について見てみよう。

表７は大学の授業について，「授業はできるだけ休まないようにしている」と聞いた回答である。国立大の学生に「あてはまる」の者が多くなっていますから，授業への出席では，国立大の方がまじめであることがわかる。

表５　アルバイトをよくした

	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	計	
BF 大	26.3	9.1	64.5	100.0	**
私立中堅大	9.4	6.0	84.6	100.0	
国立大	5.5	2.7	91.8	100.0	
計	16.3	6.2	77.4	100.0	
A 大学	28.9	8.5	62.6	100.0	**
B 大学	18.7	8.0	73.3	100.0	
C 大学	19.2	10.3	70.4	100.0	
D 大学	33.3	9.3	57.3	100.0	
E 大学	9.4	6.0	84.6	100.0	
F 大学	4.1	2.5	93.3	100.0	
G 大学	6.4	3.0	90.5	100.0	
H 大学	9.8	2.8	87.4	100.0	
計	16.3	6.2	77.4	100.0	

しかし，下段の大学別の値を見ると，たんに国立大の学生がまじめでボーダーフリー大学の学生が出席していないとは言えないことがわかる。私立Ｂ大学とＣ大学の値はいずれも80％を越えている。つまり，この２つの大学では国立大以上の者が授業にまじめに出席していると回答している。ボーダーフリー大学の中で，大学により授業への意識が大きく異なっていることがわかる。

表８は「授業中に私語をすることが多い」の結果である。この表で，もっとも「あてはまる」の割合が高い，すなわち私語が多いのは国立大学である。ボーダーフリー大学の学生は国立大学の学生よりも受講態度は良いことになる。とはいえ，ここでも個別大学の違いは大きい。私立Ｂ大学の値は43.0％であり，群を抜いて私語をする者が多いことがわかろう。

表９では「きちんとノートを取りながら授業を聞いている」の回答を示している。ここではボーダーフリー大学の学生に「あてはまる」とした者の割合が60.5％とわずかに低くなっていた。国立大学の学生の方が授業中によくノートをとっていることがわかる。

しかし，大学による差は非常に大きなものであった。私立Ｂ大学，Ｃ大学は，それぞれ72.8％，69.8％が「あてはまる」と回答しており，これは国立大学よりも高いものであった。

表10は「授業中によく居眠りをする」という問いに対する回答である。ここではボーダーフリー大学の学生が45.5％と，もっとも「あてはまる」とする者が少なくなっていた。もっと多かったのは私立中堅大学の59.2％であった。

また，ここでも大学別の違いは大きい。私立Ｂ大学とＤ大学では，それぞれ33.1％，36.4％が居眠りをするのに「あてはまる」としているにすぎない。その一方で私立Ａ大学は52.0％が「あてはまる」としており，非常に高い値であった。

表７　授業はできるだけ休まないようにしている

	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	計	
BF 大	72.6	14.2	13.2	100.0	**
私立中堅大	74.9	12.7	12.4	100.0	
国立大	81.2	7.0	11.8	100.0	
計	76.3	11.1	12.6	100.0	
A 大学	63.9	17.6	18.4	100.0	**
B 大学	80.1	11.9	7.9	100.0	
C 大学	81.9	10.8	7.3	100.0	
D 大学	74.2	12.9	12.9	100.0	
E 大学	74.9	12.7	12.4	100.0	
F 大学	78.5	7.5	14.0	100.0	
G 大学	85.5	6.0	8.4	100.0	
H 大学	81.8	7.7	10.5	100.0	
計	76.3	11.1	12.6	100.0	

表８　授業中に私語をすることが多い

	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	計	
BF 大	30.7	31.6	37.7	100.0	**
私立中堅大	21.5	25.8	52.7	100.0	
国立大	35.0	24.1	40.9	100.0	
計	31.7	28.0	40.3	100.0	
A 大学	26.6	28.1	45.3	100.0	**
B 大学	43.0	23.8	33.1	100.0	
C 大学	28.7	38.6	32.7	100.0	
D 大学	36.3	32.5	31.2	100.0	
E 大学	21.5	25.8	52.7	100.0	
F 大学	34.0	23.0	43.0	100.0	
G 大学	42.2	25.3	32.5	100.0	
H 大学	16.1	25.9	58.0	100.0	
計	31.7	28.0	40.3	100.0	

表９　きちんとノートを取りながら授業を聞いている

	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	計	
BF 大	60.5	23.0	16.5	100.0	*
私立中堅大	66.2	19.7	14.0	100.0	
国立大	66.9	18.2	14.9	100.0	
計	63.6	20.8	15.6	100.0	
A 大学	50.5	25.5	23.9	100.0	**
B 大学	72.8	17.2	9.9	100.0	
C 大学	69.8	20.1	10.1	100.0	
D 大学	62.9	24.0	13.1	100.0	
E 大学	66.2	19.7	14.0	100.0	
F 大学	67.3	17.1	15.6	100.0	
G 大学	67.9	20.1	12.0	100.0	
H 大学	61.5	18.2	20.3	100.0	
計	63.6	20.8	15.6	100.0	

表10　授業中によく居眠りをする

	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	計	
BF 大	45.5	27.6	26.9	100.0	**
私立中堅大	59.2	18.1	22.7	100.0	
国立大	55.5	19.2	25.3	100.0	
計	50.7	23.4	25.9	100.0	
A 大学	52.0	24.0	24.0	100.0	**
B 大学	33.1	26.5	40.4	100.0	
C 大学	46.5	32.0	21.5	100.0	
D 大学	36.4	29.5	34.1	100.0	
E 大学	59.2	18.1	22.7	100.0	
F 大学	56.5	17.7	25.9	100.0	
G 大学	55.8	20.9	23.3	100.0	
H 大学	49.0	22.4	28.7	100.0	
計	50.7	23.4	25.9	100.0	

同じように，「授業中に私語をすることが多い」「授業中，授業に関係のない本を読んだり，他の勉強をしたりすることが多い」「授業中に携帯電話でメールの読み書きをする」の回答で，ボーダーフリー大学の学生で「あてはまる」とする者の割合は，国立大学の学生を下回っていた。以上のように，ボーダーフリー大学の学生は，学習意識が高く，授業の受講態度は，非常にまじめなものだということがわかろう。

ただし，こうした受講状況はボーダーフリー大学の学生が，高校時代と同じように授業を受けていることを示しているのかもしれない。つまり，ボーダーフリー大学では，他の大学よりも学校化が進み，指定された授業を履修し，それをまじめに受講するという態度が定着していると考えることもできる。

さらに，こうした状況を進めているのは，各大学の取り組み，すなわち学生指導にあるのかもしれない。

大学別の結果に見られるように，一概にボーダーフリー大学とカテゴリー化できず，個別の大学で大きな差があることがわかる。こうした違いは，各大学の取り組みが学生の学習意識を高めた結果であろう。つまり，先にあげた例のように，大学が組織として，また個々の教員が学生の受講態度などに対する綿密な指導を行った結果と考えられる。それゆえ，とくに受講態度で高い値を示すボーダーフリー大学があったのだろう。しかし，その一方で，それが受講態度を受動的にさせるため，必ずしも授業への期待は高くはない。実際に，上と同様に「大学の授業では専門的知識を得られると思う」や「授業で考え方が変化したことがある」という問いでは，ボーダーフリー大学の学生で「あてはまる」と回答した者の割合は低くなっていた。

それでは，こうした学習意識は，実際の学習行動にどの程度反映されているのだろうか。最後に，実際にどの程度，ボーダーフリー大学の学生が勉強しているのかを見ておこう。

表11には学習時間の平均値を，学期中と休暇中について示している。この表からわかるように，ボーダーフリー大学の学生は，「授業・実験の課題，準備・復習」「授業とは関係のない学習」といった学習面での時間が低くなっている。また，「サークル・クラブ活動」の時間も，もっとも低いものであった。

こうした傾向は，休暇中にさらに顕著になる。休暇中を見ると「学習」と「サークル・クラブ活動」の時

表11　1日の学習時間・生活時間の平均値

	学期中					休暇中		
	授業・実験への出席	授業・実験の課題，準備・復習	授業とは関係のない学習	サークル・クラブ活動	アルバイト・仕事	学習	サークル・クラブ活動	アルバイト・仕事
BF大	5.32	2.64	1.86	1.88	3.69	2.24	1.68	4.12
私立中堅大	4.98	2.66	2.19	2.12	4.31	2.52	1.97	4.76
国立大	5.99	3.32	2.28	2.95	3.99	2.90	3.00	4.37
計	5.57	2.92	2.06	2.33	3.87	2.53	2.24	4.28
A大学	4.88	2.26	1.79	1.86	3.97	1.97	1.72	4.40
B大学	5.76	2.43	1.82	2.05	3.80	2.44	1.79	4.00
C大学	5.91	3.21	1.83	1.72	2.60	2.45	1.50	3.05
D大学	5.31	2.76	2.03	2.02	4.46	2.42	1.78	4.94
E大学	4.98	2.66	2.19	2.12	4.31	2.52	1.97	4.76
F大学	6.09	3.43	2.46	2.94	3.93	3.13	3.20	4.36
G大学	5.90	3.11	1.86	3.22	4.17	2.50	2.95	4.52
H大学	5.78	3.43	2.69	2.06	3.70	2.98	2.11	3.88
計	5.57	2.92	2.06	2.33	3.87	2.53	2.24	4.28

間がいずれもボーダーフリー大学の学生は短くなっている。つまり，ボーダーフリー大学の学生は，学習意識は高くとも，授業外では勉強せず，またサークルやクラブの活動にもそれほど熱心ではないということになる。とくにサークルなどに費やす時間が短いということは，大学ではなく，それ以外の場所に生活の中心があることを示しているのだろう。

4　ボーダーフリー大学研究の課題

以上のように，ボーダーフリー大学の学生は，学習意識は高くとも，授業への期待は低く，また授業外ではあまり勉強していなかった。その一方で，国立大学の学生は，受講態度は「まじめ」とは言い難いものの，授業外でも専門書などを読み，自身で学習をするとともに，サークルなどにより大学中心の生活をしていると言える。つまり，ボーダーフリー大で学校化が強まっている一方で，地方国立大学では，まだ伝統的な学生生活の余韻が残っていると言える。

このように，現在の大学は学生文化も，また大学内での実際の行為も明確に分化している。それでは，このように分化した大学をいかに捉えるべきだろうか。

第1に，分化した大学を分析するための枠組みを検討する必要があろう。つまり，大学を一つの機関として一元的に捉えるのではなく，とくにボーダーフリー大学を分析するためには独自の枠組みが必要とされる。

先にも述べたように，これまで，大学は一元的に捉えられてきた。大学を一元的に捉える視点は，トロウの言う，大学の発展段階，すなわちエリート，マス，ユニバーサルの3段階の受け取られ方によくあらわれている。大学は，この発展段階にしたがって，均質に機能を変容させると捉えられてきた。つまり，大学全体が時代に応じて一様に変化し，またその制度も進学率の上昇にともなって改革されなければならないとされてきた。

しかし，現実には，大学の大衆化にともなって，別の機能を持った大学が付加されたにすぎなかった。すなわち，エリート大学は，現在も研究大学として残存し，その機能を果たすことが求められている。その一方で，ユニバーサル化によって変化を求められたのは，ここで示したボーダーフリー大学であったと考えられよう。

こうした分化にもかかわらず，大学に対する視点，また大学研究の視点は，旧来のエリート大学，すなわち現在の研究大学を中心にしたものであった。また，その逆に，大学改革が叫ばれる際には，エリート大学である研究大学もユニバーサル段階にあわせた改革が求められてきた。これまでも大学のレベル別の分析によって分化したレベルの低い大学の特徴を明らかにするものはあった。本稿でも大学間の違いを強調して分析を行ってきた。しかし，こうした分析も，やはり大学という機関を総体としてとらえて分析しているに過ぎない。つまり，すでに分化して，大きく機能が変化した制度が，旧来の「大学」という一つの概念枠組みにより分析されている。

現在のボーダーフリー大学では，講義でのノートのとり方を指導し，ごく基礎的な学力をつけさせようとしている。また，ボーダーフリー大学の多くでは，専門領域であっても基礎的な知識の習得を重視するため，批判的思考力を重視する研究大学とは異なる授業方法をとらざるをえない。授業の内容や，そこで求め

られる知識や技能は，大学によって大きく異なっている。

したがって調査の際に研究大学とボーダーフリー大学を同じ枠組みで分析すると，表面的な学生の意識のみが強調され，実際の学生の行為を見誤ってしまう可能性がある。本稿で明らかにしたように，ボーダーフリー大学の学生の学習意識は必ずしも低いものではない。しかし，学習時間など，実際の学習行動は国立大学などとは大きく異なっていた。このことは，ボーダーフリー大学の学生の学習行動や学生生活が，その他の大学とは大きく異なることを推測させる。

また，学生指導でも同様の問題が生じていると考えられる。たとえば就職活動の指導は，多くの場合，大企業や大手の銀行などの採用状況にもとづいて行われる。しかし，実際にボーダーフリー大学の学生の多くが就職するのは，地元のごく小さな企業でしかない。就職活動の仕方も違えば，企業の採用の基準も異なっている。

このように，ボーダーフリー大学では，伝統的な大学とは異なる枠組みによって，調査を行う必要がある。また学生指導も，ボーダーフリー大学の実状にあわせたものにする必要があろう。どのような枠組みでボーダーフリー大学を捉えるかは今後の重要な課題である。

第２には，個別大学の分析の重要性があげられる。本稿で明らかにしたように，ボーダーフリー大学，それ自体も一括して語ることは難しくなっている。ボーダーフリー大学でも，個々の大学によって，学生の意識や行為は大きく異なっている。

こうした差異は，個々の大学の取り組み，すなわち受講態度の指導やキャリア指導，またいわゆる初年次教育の違いによって生じたものと思われる。たんにボーダーフリー大学を一括して分析するのではなく，個々の大学の取り組みを評価するためには，個別大学を分析対象とし，その取り組みの分析を行う必要がある。

その際，現在の大学の学校化の進展を考慮する必要があろう。近年，多くの大学で，大学の学校化，学生の生徒化が指摘されている。つまり，学生は，まじめに授業に出席し，良い成績を取ろうとする授業中心の学生生活を送るようになり，また近年の大学改革は学生にそのような態度を求めている。

このことはボーダーフリー大学でも変わらない。先に指摘したように，高校時代まで，必ずしも「まじめ」とは言えず，受験勉強など熱心にしていなかったボーダーフリー大学の学生が，大学では学習の機会を求めるようになる。また，大学が学習の機会を授業以外に提供していないことに不満を持つ者も少なくない。

しかし，そうした意識と自己認識にもかかわらず，現実の学習や行為には必ずしも結びついてはいない。だが，大学の中では自身を相対的にしか見ることができず，自身の行為についての評価は高いものになる可能性がある。

このような状況が，ボーダーフリー大学に対する調査を難しくしている。多くの調査が，学生に対し，その意識と自己評価を求めている。たとえば大学での成績を多くの学生調査が聞いているが，それは学生の自己評価にすぎない。それゆえ，絶対的な尺度で，学生の意識や自己評価を測定することができず，大学間の違いを過小評価することになりかねない。こうした問題を解決し，さらに学生の大学での社会化の過程を明らかにするためには，アンケート調査だけでなく，フィールドワークなどの質的な調査が求められる。こうした質的調査の必要性は，ボーダーフリー大学に限らず，その他の大学でも同様であろう。

さて，最後にこれまでの考察を踏まえて，ボーダーフリー大学の「改革」，すなわち，ボーダーフリー大学の今後について，簡単に述べておきたい。

最初に大学の分化に応じた改革の必要性である。先にも述べたように，現在の大学は，大きく分化している。それにもかかわらず，大学改革は一元的に行われている。個別大学の実状にあわせた改革がさらに必要になろう。実際にボーダーフリー大学では，学生の現状にあわせた改革を積極的に行っているところも少なくない。

ただし，多くの場合，そうした改革は，授業の改善という形で行われている。しかし，本稿の結果が示すように，授業はまじめに受けるとしても，授業外での学習などは，十分であるとは言えない。授業外でいかに学習するか，あるいは大学生活の中で学習習慣をつけるための指導も重要であろう。その際，ボーダーフリー大学の学生に，大学で，また授業で何を学ばせるかは大きな課題である。伝統的な大学に求められるような幅広い教養を求めるのか，基礎的な学力の向上を求めるのか，また専門科目の基礎的な知識の定着を求めるのか，あるいは就職するための知識と技能を求めるのか，これまでの大学という概念にとらわれない考え方が必要とされよう。

また，知識の学習以外の側面を重視する必要性もあるだろう。しかし，大学での経験の総体が大学での社会化に影響を与えるのならば，授業以外の部分，いわば高等学校以下での特別活動と生徒指導にあたる領域での改革も必要とされる。

また，このことは，先に述べた大学の学校化の影響

もある。これまでの日本の「学校」の特徴は，知識ばかりでなく，道徳的な教育を重視してきたことにある。とくにエリート教育では人格の完成が求められてきたが，いわゆる底辺校では，厳しい校則と生徒指導により，しつけと規律が求められてきた。

今後，ボーダーフリー大学がさらに学校化する中で，やはり道徳的な領域の教育は欠かせないものになるのだろう。すでに，先に指摘した受講態度のみならず，社会人としての振るまいを指導している大学も少なくない。また，「学士力」や「社会人基礎力」として，大学卒業者に必要とされる資質の提言も行われている。しかし，そうした提言の内容は，必ずしもボーダーフリー大学の実情に応じたものとは言えない。こうしたボーダーフリー大学での道徳的な教育の領域がどのようになるのか，この点も，大学という概念にとらわれずに考えていく必要があろう。

【参考文献】

居神浩ほか 2005『大卒フリーター問題を考える』ミネルヴァ書房。
石渡嶺司 2007『最高学府はバカだらけ』光文社新書。
藤井泰・山田浩之編 2005『地方都市における学生文化の形成過程』松山大学地域研究センター。
金子元久 2007『大学の教育力』筑摩書房。
苅谷剛彦ほか 2006「大学から職業へ　その１－就職機会決定のメカニズム」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第46巻，75-98頁。
葛城浩一 2007「F ランク大学生の学習に対する志向性」『大学教育学会誌』第29巻第２号。
三浦展 2008『下流大学が日本を滅ぼす』
溝上慎一編 2001『大学生の自己と生き方』ナカニシヤ出版。
溝上慎一編 2002『大学生論』ナカニシヤ出版。
望月由起 2008「高等教育大衆化時代における大学生のキャリア意識」『高等教育研究』玉川大学出版部。
大阪大学大学院人間科学研究科教育技術開発学研究室編 2004『大学生にとって，いま「大学」とは？』(「大学生の生活意識に関する調査」報告書)。
櫻田裕美子2007「F ランク大学の学生の学習意識」山田浩之・葛城浩一編『現代大学生の学習行動』広島大学高等教育研究開発センター。
杉山幸丸 2004『崖っぷち弱小大学物語』中央公論社。
武内清編 2003『キャンパスライフの今』玉川大学出版部。
武内清編 2003『大学とキャンパスライフ』玉川大学出版部。
竹内洋 1991『立志・苦学・出世』講談社。
東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター 2008『全国大学生調査　第１次報告書』。
山内太地 2008『下流大学に入ろう！』光文社。
山田浩之 2004『マンガが語る教師像』昭和堂。
山田浩之・葛城浩一編 2007『現代大学生の学習行動』広島大学高等教育研究センター。